



Title	vP-raisingについて : Biberauer & Roberts (2005/2006)に対する短評
Author(s)	加藤, 正治
Citation	大阪大学英米研究. 2014, 38, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99379
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

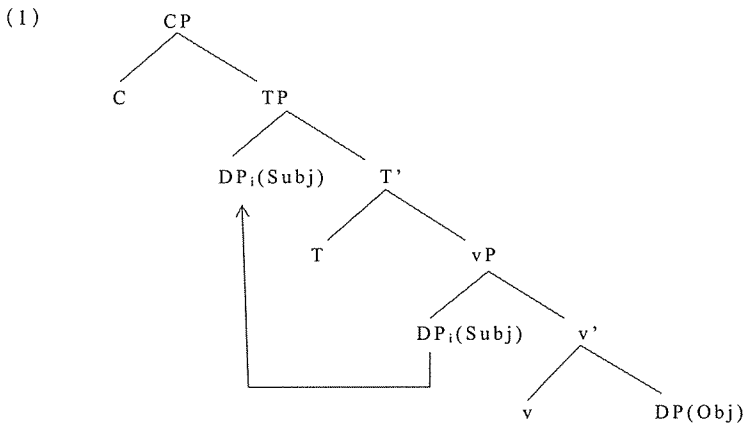
The University of Osaka

vP-raising について —Biberauer & Roberts (2005/2006) に対する短評—

加藤 正治

1.

本稿では Biberauer & Roberts (2005) や Biberauer & Roberts (2006) において提唱されている vP-raising を用いた分析を検討する。具体的には、中英語（以下 ME）の従属節には基本語順からかけ離れた語順が見られるが、そのような語順に関して Biberauer & Roberts（以下 B&R）が提案している vP-raising を用いた分析の問題点を指摘する。B&R が説明のために用いている枠組みは極小主義（Minimalism）の枠組みで、句構造に関しては Kayne (1994) の考え方を採用している。これに従うと文の構造は概略以下ようになる。



通例は、Tの持つEPP素性を照合するためにSpecvP内の主語がSpecTPに繰り上がるが、B&Rのアイディアによれば、古英語（以下OE）やMEにおいては別のオプションとして随伴（pied-piping）により主語を含むvP全体をSpecTPに繰り上げることも可能であったとされている。この場合、英語はもともと随伴を許容する言語であるので、主語に代わってvPを繰り上げることも当然許容される操作であり、何か特別な操作が付け加えられているわけではないのでコストがほとんどかからない、というのがポイントである。このvP-raisingを用いた操作を認めると、従来Stylistic Frontingと呼ばれている規則が適用された語順やその他の例外的な語順が説明できるというのがB&Rの主張である。以下のセクションではB&Rが提示している例で問題があると思われるものを検討する。

2.

まず取り上げるのはStylistic Frontingが適用されているとされている構造である。Stylistic Frontingはもともとアイスランド語に見られる例外的な語順を説明するために提案されたもので、主語位置が何らかの意味で空所になっている場合に分詞、副詞あるいは否定辞を前置する規則である。次の例はMaling (1990) から引用されたアイスランド語のStylistic Frontingの例である。

- (2) Honum mætti standa á sama, hvað **sagt** væri um hann
Him might stand on same what said was about him
“It might be all the same to him what was said about him.”

この例では、関係詞節の主語位置には空所（この場合は痕跡）が存在し、過去分詞が助動詞の右側から左側へ移動している。MEにも同様の現象が見られ、B&Rは次の例を挙げている。

- (3) wipþ all þatt lac þatt **offredd** was bifoþenn Cristess come
 with all that sacrifice that offered was before Christ's coming
 “with all the sacrifice that was made before Christ's coming”
 (*Ormulum* I.55.525)

この例でも (2) と同じく関係詞節の主語位置に空所がある。ME の受動文の語順は通例「主語＋助動詞＋受動分詞」とされているので、受動分詞 *offredd* は Stylistic Fronting によって前置されていると考えられる。B&R がこの文に対して提案している vP-raising を用いた派生方法は次のようなものである。

- (4) [_{TP} [_{vP} t_{Op} **offredd**] [_{T'} [_T wass] t_{vP} t_{Op} **bifoþenn Cristess come**]]
 (Op は関係代名詞として機能する空演算子)

T が持つ EPP 素性は探査子 (probe) として機能し、通例 D 素性を持つ要素、即ち DP を目標 (goal) としてそれを牽引 (attract) する。他方、vP-raising は随伴によりそのような DP を含む vP 全体を牽引することになる。通常であれば vP 内の主語が目標になるが、(4) は受動文であるので vP は主語を持たないとされている。B&R は Baker, Johnson, & Roberts (1989) の考えに従って受動分詞 *offredd* が D 素性を持つと考えてこの問題を解決している。これはこれでよいのかもしれないが、次の例の遊離した数量詞 *all* の位置が示すように、受動文においては表層主語が SpecvP を通過していると考えられる。

- (5) The students were all arrested. (Radford (1997) p. 185)

従って受動文では (非人称の場合を除けば) 常に SpecvP の位置に DP の痕跡があることになる。(4) の *offredd* の左側の t_{Op} がそれに該当すると考えられるので、受動分詞ではなくこの痕跡を目標とする方が説明としては単純かつ明

快なのではないと思われる。

次に、中抜き文字になっている *biforenn Cristess come* に関して、この句は vP 内の要素であるにもかかわらず vP-raising によって移動されていない。この点に関して B&R は位相理論 (phase theory) を用いて非常に鮮やかな解決法を提案している。B&R は受動文の vP を位相とみなし、次の位相不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition (PIC)) の適用を受けると考えている。

- (5) In a phase α with head H, the domain of H is not accessible to operations outside α , only H and its edge are accessible to such operations.

(Chomsky (2000) p.108)

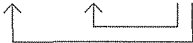
PIC に従えば *biforenn Cristess come* の部分は位相外部の探査子 T からアクセス不可能になり、結果的には主要部 *offredd* とその左側の t_{op} のみが SpecTP へ繰り上がることになる。この点については異論はないが、空演算子 Op の移動に問題があると思われる。もしこの空演算子が vP-raising の後に SpecCP へ移動したとすると、その移動は明らかに主語の一部を移動していることになり主語条件 (subject condition) の違反になる可能性が極めて大きい。他方、vP-raising の前に空演算子を移動すればどうなるか。T と vP が融合 (merge) するとすぐに T が持つ EPP 素性を照合するために vP-raising が適用されると考えられるので、後に C が融合するまで vP-raising の適用を遅らせることは不可能である。つまり、C の融合を待って空演算子を移動しようとしてもその前に必ず vP-raising が適用されてしまうので、空演算子は移動できないまま *offredd* と共に vP-raising によって SpecTP へ繰り上がることになる。従って、主語条件に違反しないような派生をすれば空演算子を SpecTP に繰り上げ、次に C が融合するのを待って SpecCP へ移動するしかないのであるが、これは vP-raising を適用していないので (4) の派生の仕方ではなくなり (3) でみられる語順を派生できないことになる。この点は大きな問題であると言わざるを得ないが、解決策が無いわけでもない。Chomsky (2008) において、(6)

の派生途中の構造は (7) であり、疑問詞 *who* の SpecTP への移動と SpecCP への移動が同時並行的に行われ (8) の構造が派生される、という考え方が提案されている。この場合 C は周縁素性 (edge-feature) と一致素性 (Agree-feature) を持ち、T は C から一致素性を継承し、そしてこれら二つの素性が各々同時並行的に *who* を牽引すると仮定されている。

(6) *who* saw John

(7) C [T [*who* [*v** [*see* John]]]]

(8) *who* [C [*who* [T [*who* *v** [*see* John]]]]]



この考え方を利用すれば、(4) において空演算子の SpecCP への移動と *vP* の SpecTP への移動が同時並行的に行なわれているとみなすことができ、主語条件の違反は回避できる。ただし、このままでは *vP* を SpecCP へ移動することが可能になり不適切な構造が派生される可能性がある。それを阻止する方法が問題になってくる。また、この Chomsky (2008) の考え方が一般的に用いられているという話は寡聞にして知らないもので有効性に関しても大いに疑問である。

次の例も Stylistic Fronting が適用されている例である。

(9) … and he besohte at gode þpat **naht** ne scolde reinin
 and he sought of God that not NEGATIVE should rain
 “… and he asked of God that it should not rain”
 (Vices and Virtues 1.143.1787)

この例は非人称動詞構文であるので主語位置は空所になっていると考えら

れ、Stylistic Fronting が適用されて否定辞 *naht* が *scolde* の右側から移動したとされている。B&R の考え方では、否定辞 *naht* と（恐らくは）準虚辞的空主語（quasi-expletive null subject）を含む *vP* が SpecTP に繰り上げられたとされている。助動詞的な要素 *scolde* は当時はまだ完全に法助動詞化していないと考えられる。従って *vP* の主要部位置から *T* へ移動するので *vP* 内にはその痕跡しか存在しないし、否定辞 *naht* は *vP* に付加しているとすれば、(9) において実質的には *vP*-raising によって *naht* しか移動しないのは当然である。B&R (2005) においては、当時の *naht* はその成立過程から考えてまだ DP であるとみなし、これが探査子 *T* の目標になるとされていたが、B&R (2006) においてはその点にはまったく触れていない。準虚辞的空主語の存在を示唆しているので *naht* を DP とみなす考えは破棄したのではないかと考えられる。説明としては準虚辞的空主語を探査子 *T* の目標にする方がはるかに単純明快である。この場合、準虚辞的空主語は内側の Spec*vP* に、そして *naht* は外側の Spec*vP* に位置していると考えられる。「準虚辞」ということは逆に言えば「準項 (quasi-argument)」ということであろうから位置としては当然内側の Spec*vP* 位置になるはずである。この点に関して、同じく否定辞を含む次の例を考える。

(10) *Thairwith he nocht growit*

at-this he not shrunk

“At this he did not shrink (in fear) ”

(cl448: Richard Holland *The Buke of the Howlat*, 7)

文頭の要素 *thairwith* は話題化されて SpecCP 位置に前置されているが、動詞第二位現象 (verb second phenomena) を引き起こすタイプではないと考えられるので、倒置語順にはなっていない。従って *he* 以下は TP 内の要素ということになる。B&R は (10) の派生プロセスを示していないが、*vP*-raising を用いた派生は概略次のようになると考えられる。

(11) [_{TP} [_{vP} he nocht t_v] [_T [_T growit] t_{vP}]]

即ち、vPの主要部にある動詞 growit がTへ移動し、その痕跡を含むvPがSpecTPへ繰り上げられたと考えられるが、この場合、否定辞 nocht は内側のSpecvP位置にあり、主語 he は外側のSpecvP位置になければならない。これは(9)において想定された位置とちょうど逆になっている。実際の語順に合わせるように否定辞がvPに付加する位置を適宜使い分けているとは考えにくいので、何らかの理屈に基づいて使い分けをしているのであろうが、それが示されていない点が不備であると考えられる。

ついでに言えば、従来OEのみならずMEでも定形動詞がTへ移動するとされているので、(9)のようにvPの主要部にある動詞がTへ移動するのが当然であると思われるが、B&Rはその辺りのことがはっきりしていないように思われる箇所がある。例えば、B&R (2005) において次のような構造記述がある。

(12) [_{TP} S T V_R [_{TP} t_S V+v+T [_{vP} t_S [_{vP} t_v O] t_{v+v}]]] (p. 17)

(13) [_{TP} [_{vP} S O V-v] T t_{vP} [_{vP} t_v t_o]] > [_{TP} S T [_{vP} t_S O V-v [_{vP} t_v t_o]]]
(p. 26)

(12)は主節の動詞V_R (restructuring verb: 現代英語の法助動詞の祖先)が不定詞節を目的語にとっている構文で、下位のTPにおいて不定詞Vはvに繰り上がり、さらにTに繰り上がっているのに対して、上位のTPにおいてはTとV_Rは離れたままである。同様に(13)においても動詞の複合体V-vは明らかにTに繰り上げられていない。これらの場合、動詞がTに繰り上がっても上がらなくても語順は同じになるので実質的には影響がないかもしれないが、(もし印刷上の誤りでなければ) このように使い分けをする(あるいは、使い分けできる)理由、および、一つの文に対して二つの異なる構造が想定

できることに対する処理の方法が示されるべきではないかと思われる。

次の例は、主語が移動せず元位置にとどまっている例である。

(14) And in þis tyme were sent **writtis** þorowoute þe lond

And in this time were sent writs throughout the country

“And in this time, writs were sent throughout the country”

[Capgrave Chronicles 213.72]

明らかに動詞第二位現象を示していて、B&R (2005) は次のような構造を与えている。

(15) [_{CP} In þis tyme [_C were] [_{TP} [_{vP} sent writtis þorowoute þe lond] T t_{VP}]]

この構造表示では sent writtis þorowoute þe lond という vP が繰り上げられているが、正しくは、上記の (3) の場合と同じく、sent だけが繰り上げられ、writtis þorowoute þe lond の部分は T の後ろに残っているとみなすべきである。さらに、動詞第二位現象は統語的操作の結果であると仮定すると、やはり (3) の場合と同じく文頭の in þis tyme の移動の仕方が問題になってくる。この in þis tyme が話題化によって SpecCP 位置まで繰り上げられるとすると、途中 SpecvP 位置に到達する。その後 T が融合され vP-raising が適用されるので sent と一緒に in þis tyme も SpecTP 位置へ繰り上がることになる。こうなると (3) と同じく in þis tyme の更なる移動は主語条件の違反の可能性が高くなる。

3.

以上、Biberauer & Roberts (2005) と Biberauer & Roberts (2006) で提案されている vP-raising を用いた分析の問題点を見てきた。詳細に検討すれば更に細かな問題点が見つかるかもしれないが、目につくものだけをピックアップ

プした。何らかの修正を期待したい。しかしながら、全体としては、OEとMEに見られる様々な語順を極小主義の立場から説明しようとする試みに対しては高い評価が与えられると判断される。(3) のところで見たとようなPICを有効に利用した分析は鮮やかであるし、ここでは触れなかったがB&R (2005)で述べられているパラメータに関する主張も説得力があると思われる。今後の進展を期待したい。

参考文献 (抜粋)

- Baker, M., K. Johnson, & I. Roberts (1989) . “Passive arguments raised” *Linguistic Inquiry*, 20, 219–251.
- Biberauer, T. and I. Roberts (2005) . “Changing EPP parameters in the history of English: accounting for variation and change” *English Language and Linguistics* 9-1, 5-46.
- Biberauer, T. and I. Roberts (2006) . “Loss of residual 'head-final' orders and remnant fronting in Late Middle English: Causes and consequences” In Hartmann & Molnárfi (eds.) (2006) *Comparative Studies in Germanic Syntax: From Afrikaans to Zurich German* (pp.263-297) . Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Chomsky, N. (2000) . “Minimalist inquiries: The framework” In Martin, Michaels & Uriagereka (eds.) , *Step by Step. Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik* (pp.89–156) . Cambridge MA: The MIT Press.
- Chomsky, N. (2008) . “On Phases” In Freidin, Otero & Zubizarreta (eds.) *Foundational issues in linguistic theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud* (pp.133-166) . Cambridge MA: The MIT Press.
- Kayne, R. (1994) . *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge MA: The MIT Press.
- Maling, J. (1990) . “Inversion in embedded clauses in Modern Icelandic” In Maling & Zaenen (eds.) , *Modern Icelandic Syntax* (pp. 71–91) . San Diego CA: Academic Press.
- 中尾俊夫 (1972) . 『英語史 II』 東京：大修館書店.
- Radford, A. (1997) *Syntax: A Minimalist Introduction*. London: Cambridge University Press.